

研究結果報告書

吉野作造の「哲学」：東アジア思想の文脈における考察

所属：広東外語外貿大学 日本語学部

役職：教授

氏名：趙 曉靚

吉野作造の歴史的意味を三つの方面から説明することができる。つまり、大正デモクラシー運動のイデオログ、政治学や歴史学の研究者、そして思想家である。中でも思想家としての吉野作造は特別に重要な意味をもっているといえよう。なぜなら、吉野の「哲学」、すなわち一貫した価値体系は「個々の状況的発言および学問的考察を貫いて、それらに共通の意味」を賦与し、「イデオログとしての吉野、また学者としての吉野に等しく根底を与えた」からである。そのため、吉野の価値体系を解明するのは吉野作造研究にとってもっとも肝心の課題とされる。

本研究は、吉野作造の「哲学」を東アジア思想との比較の視点で展開するものである。具体的には、(1) 価値体系の普遍性、(2) 普遍的価値体系における人間論、(3) 普遍的価値体系における政治論という三つの方面にしぼって、中日両国の儒学思想をはじめとする東アジア思想との比較をおこなう。そして、本研究によってつぎのようなことが解明される。(1) 吉野においては、「価値」の源がキリスト教が指定する万物の創造主としての、超越的かつ普遍的な「神」である。一方、儒教の「理」とヨーロッパの「神」とは、「価値」の源としてはいずれも超越的・普遍的なものであり、したがってそのもとで生み出された「価値」が平等性と普遍性を論理的に含みこむところで一致しているのは確認できよう。(2) 吉野は「人間を等しく神の子だと見」て、したがってすべての人間に無限の成長能力が有することを主張する楽観的な人間観の持ち主であった。儒教では普遍的価値の源が「天」に求められているが、普遍的価値（「仁」「良知」など）を自覚する能力がすべての人間に内在しているとされている。普遍的価値を自覚する理性に人間の本来の特質を求める点においては、吉野作造と中国の思想伝統との一つの架け橋がみられるといえよう。(3) 吉野の政治論を支えたのはキリスト教信仰に淵源する普遍的な精神、彼の言葉でいうと「人格主義」である。それは国内政治において「民本主義」と現れている一方、国際政治の場に行くとも「国際民主主義」となってくる。中国では「易姓革命」の思想的背景として流れているのは、皇帝が支配者たりうるのは、タテマエであれ、共なり公平が期待されているからであり、それがなければ皇帝は単に天下を独り占めする「独夫」「民賊」でしかないという論理であった。そしてこのような政治権力が普遍的な原理に従うべきという思想的伝統は、近代まで流れてきて近代的ナショナリズムの形成においても大きな役割を果たしていたのである。孫文の民族主義が「平等」という普遍的原理を媒介に国際主義へと止揚されていったのもその一例といえよう。

以上の比較によって吉野の思想の普遍主義的特質、とりわけ東アジアの伝統のもとでその思想的意味を考え直すのは、アジアの近代化に対するアジア的な思想原理の果たすべき役割の再考に1つの示唆になると考えられよう。しかしだからといって、アジア的原理の近代的復権を安易に主張することもできない。というのは、「天下為公」のような普遍的な価値は主に知識人や政治的エリート頭のなかで醸成され、継承されてきた観念的なものであり、かならずしも民衆の現実生活に浸透していないのである。民衆にとっては、国家の公も天下の公も実生活を離れたところに存在し、現実的には親戚、仲間同士の閉鎖的、排他的なつながりこそが「公」である。この意味では普遍的な価値を観念的な世界から市民社会の実践的な倫理に拡充すること、吉野のことばを引けば、俗塵の中でいかにして神に接するか（『ヘーゲルの法律哲学の基礎』）というのは依然として今日の課題であろう。

研究成果の公表について

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

1. 趙 曉靚「吉野作造の哲学：東アジアのコンテストにおける考察」、中国日本史学会年度大会「日本の社会変遷と中国」、2016. 8. 12、吉林省吉林市北華大学
2. 趙 曉靚「吉野作造の『民本主義』思想と儒学」、第一回海上シルクロード沿線国家交流史シンポジウム、2016. 12. 17、広東省広州市広東外語外貿大学

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

1. 趙 曉靚「吉野作造の哲学：東アジアのコンテストにおける考察」、『歴史教学』、2016年第7号
2. 趙 曉靚「思想家としての吉野作造」、『吉野作造研究』、2016年第12号

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）